
速賢の聖女達

射手座症候群

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

速贄の聖女達

【Nコード】

N0474W

【作者名】

射手座症候群

【あらすじ】

主人公ラグナ？ガークラントは衛兵になるため国家都市ルトリーンへと向かうが???

JRPGとかで使い回されすぎてカビの生えたような設定をできるだけ掘り下げてみたファンタジー小説
そのため設定が無駄に多いです。

ブログ（前書き）

携帯投稿の為、更新速度が非常に遅いです。御了承下さい。

プロローグ

魔法、特定の人間だけが使うことのできる能力、人の言葉を話す動物、人を喰い地を揺るがすような怪物。

そんな物が当然のように存在し、密接に関係する世界。

その中で魔法は製鉄技術や農工技術と同じように発展し、使われた。

新しい魔法を発見した人間が讃えられ、その魔法を手にいれる為に国同士の争いが起こったり、一つの魔法陣の為に国家だけではなく個人の運命までもが大きく変化した。

魔法は歴史を常に変えてきたのである。

そして今、一人の少女と魔法を中心に歴史の大きなターニングポイントが作り出される事となる????

我が人生のターニングポイント

ラニウス大陸中部の山にある村シルドリン

その村から続く古い下山道を一人の少年が走っていた、左の腰にリボルバー、右の腰に刃の部分がない柄だけの奇妙な剣を着けて。

彼の名はラグナ？ ガークラント、この物語の主人公だ。

彼は定期的に行われる警備衛兵の募集に申し込む為、山を降りて直ぐの所にある都市国家ルトリンへと向かっていた。

ラグナは焦っていた。

前日の大雨でいつも下山するのに使う道にある橋が流されてしまい、その道よりも数倍時間のかかる下山道を使う事になってしまい時間が圧迫しているからだ。

警備衛兵の募集終了時刻は2時、それまでに申し込まなければ。

ラグナはうつそうと茂った森の中を走りながら腕時計を見る。

（今は1時40分、あと10分ぐらいで到着だから？？？ぎりぎり間に合いそうだな）

そう思った瞬間、突然真横から火の玉が飛んできた！

「うおっ！」

火の玉は頭のすぐ上を通過し、近くにあった木の幹に衝突してはじけ飛ぶ。

（魔法か！）

急いで火の球が飛んできた方向へと走っていくと、尾が二つにわか

れたオオカミのようなモンスターが五匹で一人の少女を囲んでいた。少女は一步も動こうとせず、ただ立ち尽くしている。

そのうちの一匹は先程の火の玉に当たったのだろうか、腹の部分を焦がし、足を引きずって茂みへと退いていった。

ラグナは瞬時に状況を理解し、腰にある刀身のない剣を抜く。

「時間ねえんだ、さつさと終わらせねえと！」

剣の柄の先からきらきらと光る赤い煙が出て、さらにそれが凝縮し、赤いガラスのような色をした両刃剣になった。

「こっちに来い、化け物！」

そうラグナが叫ぶと五匹のうちの二匹がこちらを向いて襲ってきた！

素早く剣を振り一匹目を頭から叩き斬る。叩き斬られたモンスター

は叫び声を上げつつ赤い煙となって消え去った。

その瞬間、少女は一步も動かずに魔法陣を展開し、自分の周りに火の渦を引き起こした。

少女に牙を向けていた2匹のモンスターは為す術なく火の渦に巻き込まれる。

かなり高位の魔法だ。

ラグナはその魔法の威力に驚いたと共に、自分が助けに入る必要は無かったのではないかと思った。

その魔法に目を奪われていた一瞬の隙をついて残った1匹がラグナの腕を引っ掻いた！

「痛っ！！」

勝てないと悟ったのだろうか、モンスターはそのまま脇目も振らずに逃げていく。

「逃がすかよ！」

そう言っただけでラグナは素早く剣を腰に戻しリボルバーに持ち替え、1発だけ撃った。

ズドン！

その音がしたコンマ数秒のあと、モンスターは消滅した。腰に戻した剣の刀身が再び煙となって消えていく。

（この辺りでこんな数のモンスターが出て来るなんて珍しいな？？）

ラグナはそう思いつつ、まったく動かない赤髪の少女に怪我はないか聞く為に近づこうとした。が、ラグナは気がついた。

少女が自分を恐れと警戒を含んだ目で見ている事に。

少女は動いたり喋ったりせずに、その赤い目をじっとラグナに向ける。

（どうしてそんな目で俺を見ているんだ？　　？？？訳がわからねえ）

ラグナは混乱し、どうすればいいかわからず立ち尽くしていた。

そのまま2人は無言でしばらく見つめ合う。

微妙な空気が周囲を包み、静寂を作り出していた。

（とにかく話をしなきゃ始まらない？？？か）

そう思ってラグナは少女にゆっくりと近づき、話かけようとする。

しかし、意外な形で静寂は破られた。

「あのー????怪我はな」ガサツ!!

真横の茂みから腹の部分が焦げた先程のモンスターがラグナ目掛けて飛び込んできた!

ラグナは素早く真後ろへ下がって間髪を回避する。

しかし、回避を終え、ラグナの姿勢が安定する前にモンスターはラグナの頭目掛けて再度飛び込んでいた。

間に合わない!

頭から食いつかれることを覚悟した瞬間、モンスターの後ろに火の玉がぶつかり、モンスターは短い叫び声を上げた!
モンスターの後方へ目をやると少女は持っていた杖をこちらに向けていた。

(助けてくれたのか!?)

そう思った瞬間、火の玉の反動でより速いスピードになったモンスターがラグナの顔にぶつかった!

バキッ!!

ガ。ルのサマーソルトキックが当たったかのような姿勢でラグナは吹っ飛んだ。そのまま仰向けになって倒れ込む。

(こんなのって????ねえよ)

遠退いて行く意識の中、煙となって消えていくモンスターを見ながらラグナはそう思うのであった

新緑と曇り空とでこぼこした地面に包まれながらラグナは目覚めた。気絶する瞬間に見た景色が再び目に入る。

どうやら気絶した後放置されていたらしい。少女の姿も無くなっている。

残ったのは腕の傷と全身についた泥だけだった。

「いったい何だったんだ??? 普通目を覚ましたら知らない天井があるとかそんな展開が??? あ!」

ラグナは今最も優先すべき用事を思い出し慌てて時計を見る。

時計の短針は依然として1時を指していた。

長針と秒針が無くなっていたが。

「うおオン!!」

時計がぶっ壊れ、時間が分からない以上僅かな可能性にかけて走るしか無い。

さっきの少女についていろいろ考えたい気持ちもあるが、その問題は頭の隅にとりあえず追いやることにする。

「ええい! 駄目元だ!」

再び全力で走り始める。

2、3度曲がり道を通った後、道の先が突如途切れ、一直線に長く、広くのびた少し急な下り階段が待っていた。これを下り切れればほぼ到着だ。

その証拠に眼下には半月の形をした大都市、ルトリーンが広がる。

（間に合ってくれよお！）

そう祈りつつラグナは階段を転げ落ちるようなスピードで降りた。その時、曇り空の隙間から太陽が一瞬だけ顔を出し、まるでラグナを歓迎するかのようにその奇妙な形をした都市を照らしていた???
（ルトリーン政府中枢区総合管理事務所にて）

Bannon!

ラグナは破壊するような勢いでドアを開け、脱兎の如く受付へと向かう。

視界の端に映る受付嬢の腕時計は1時57分を指していた

「ラグナ? ガークラントです、衛兵募集の申込みにきまちたあ!!」

興奮と喜びでフルネームを叫んだ上に噛んでしまった。

事務所の職員全員が一斉に自分を見るが、今はそんな事どうでも良い。

終わり良ければ全て良し、だ。

受付嬢は一切顔を変化させずラグナに言った。

「10分前に定員になりました。」

死にたい

受付嬢はとどめといわんばかりに言葉を加える。

「次の募集は1年半後の予定です」

ラグナは力無く外へと出て、何をすれば良いかわからず亡霊のようにただ都市中をさ迷っていた。

シルドリーンに戻ってみようかと考えたが、衛兵になろうと意気揚々と村を出た17歳ともなる少年が何の収穫もなく泥まみれで村に帰ってくれば、冷たい視線を投げ掛けられ村八分にされるに決まっているだろう。そんな事は許されない。

（このまま農家にでも働きに行っちまおうかなあ）

そう考えた矢先、ぽつりぽつりと雨が降り始めた。それは神様が許さないようだ。

二度ある事は三度ある とか 泣きつ面にハチ と言うが、いくらなんでも不幸が続きすぎだろう

橋がぶつ壊れて迂回せざるを得なかったり謎の赤髪少女に間接的とはいえど吹っ飛ばされたり衛兵になれなかったり、しまいには雨も降り出す。

（矢でも鉄砲でも河豚でも何でも持ってこい！）

自暴自棄になりかけてわけのわからん事を考えていると、後ろから声が聞こえた。

「その腕に傷のある少年、ちょっと待て」

（今度はなんなんだ??? 勘弁してくれ）

そう思って振り返ると、リボンの無いタキシードを着た30歳程の

銀髪の男が立っていて、腰には着ている服には似合わないやや長い刀をつけていた。

男は抑揚の無い落ち着いた声で聞く。

「君はプロヴァーか？」

当たっている

「そうですね???何故わかったんですか？」

「腰にあるそんな妙な剣をつけていれば誰だってわかるよ。」

男は続けて言う。

「君はこの都市の人間か？」

「違います、シルドリンからです」

「シルドリンからプロヴァーがルトリンに来るとしたら???衛兵募集の申し込みにでも来たのだろう?その顔の様子じゃ出来なかったみたいだが。」

また当たりだ。

事務所に駆け込んだ時にこんな姿をした人間はいなかったし、この男が傘を差しているのを見ると、少なくとも自分が申し込みを拒否された後にこの男は外出したのだろう。

つまり、この男は自分が事務所にいる姿を見ずに予想だけでこれらの事をいい当てたのだ。この男の洞察力にラグナは驚いた。その顔を見て男は満足そうに言う。

「それで今君は衛兵の仕事の他に何かないか探してあちこち歩いている訳か。」

今度はハズレだ

別に探し歩いている訳ではない。無気力に任せてほつつき歩いているだけだ。

「仕事は無いですが別に探してる訳じゃないです」

男は不満そうに言う。

「まあ、とにかく仕事がほしいという事には変わりあるまい。そこで話があるのだが???聞いてくれないか?」

「はあ???」

「決まりだ。しかし今この雨の中話すのも面倒だ、どこかで話そう。」

そう言つて半ば強引に丁度近くにあった”Four Feathers”と書いてある小さな看板がぶら下がった二階建ての建物へと連れていかれた。

その中は小さな酒場になっていて、カウンターと3つのテーブルがあった。酒の品揃えも中々だ。

まだ夜になっていないからだろうか、客が一人もいない。

それどころか店員すらいない事にラグナは気がついた。

「あー???誰もいないんですけど」

「気にする必要は無い、カウンターで話そう。」

そう言われ、カウンターに並んで座った。

しばしの沈黙の後、男が口を開く。

「君の名は？」

「ラグナ?ガークラントです」

「そうか、ではラグナ君、私のなんでも屋で仕事をしないか？」

「へ？」

「勿論タダで、という訳にはいかん、給料も支給するし食事も寝る場所も保障し???」

「ま、待って下さい！」

いくらなんでも虫の良すぎる話だ、きつと何かあるに違いない。
ラグナはそう思い、言い返す。

「いきなり会って5分も経ってない人間に対して仕事の勧誘って何事ですか!?! 普通こう???なんというか相手の性格とか仕事の内容を互いに確認してから勧誘するんじゃないんですか!?!」

「確かにそうだな、ではラグナ君、好きな果物はなんだ？」

「イチゴです」

「私も好きだ　気が合うから私のなんでも屋で仕事をしないか？」

「そういうことじゃなくて！」

「君が仕事にあぶれかけていると言うから私は勧誘しただけだ、私の勧誘方法がどうであろうと君がこの勧誘を蹴れば君は仕事にあぶれる事に変わりあるまい。」

確かにそうだ、余りにもうさん臭いがこの男は自分に救いの手を差し延べているのだ。

自分で情報を少しでも引き出して勧誘を受けるべきか考えるしかない。

「????　一つ質問がありますがいいですか？」

「何でも言ってくれ。」

「さっき給料が出ると言っていました。が月どれぐらいですか？」

男は微笑んで言う。

「企業秘密だ」

「がああああ……！」

もはや足元を見ているなどという次元ではない。

「そんな細かい事はどうでも良いだろう？　今最も重要なのは君が私の勧誘を受ければ仕事にあぶれる事が無くなると言う点だけだ。勧

誘を受けてくれるね？」

恐らくこっちからどんな質問をしてもこの男はこう言って答えない気だろう。

今のラグナの精神状態ではそれに対抗する程の力は残っていないかった。

「わかりました???」

力無くラグナは言う。

「契約成立だ」

そう言つて男はおもむろにイスから立ち、カウンターの中へと入る。

カウンターの棚にあるウイスキーを取つて小さいグラスに注ぎ、ラグナの前に置く。

「自己紹介がまだだったな、なんでも屋”Four Feathers”の社長、シエルビウス？リトレントだ、私達の店へようこそ、歓迎しよう。まあ私達は店の名前を縮めて”四羽”と呼んでいるがね。」

「はあ!!?」

ラグナはこの酒場の名前を思い出して驚愕する

「なんでも屋が酒場を経営して何が問題があるかね？」

なにくわぬ顔で言われる。

もし自分が勧誘を受けたとしてもその後心変わりを起こすかもしれない。そんな事を考える時間を与えないように最初から自分の店に引き込むために声をかけるタイミングを見計らっていたのだろう。この男は全て計算済みだったのである。

（もうどうにでもなっちまえ！）

ラグナはヤケクソになってウイスキーを一気飲みした。

自分の今の感情を代弁するかのように喉の辺りが熱くなる。

「いい飲みっぷりだ、これなら安心だ」

「何がですか！？」

ラグナはシエルビウスに対して怒ったような口調で聞くが、シエルビウスは顔色を変えずに返答する。

「なあに、こつちの話さ、二階に君の部屋がある。今日からそこで生活してもらうぞ。ついて来てくれ。」

そういつてシエルビウスは2階への階段を上り始める。ラグナもあわててついていく。

「何人が四羽に所属しているんですか？」

「私と君を含めた常勤が4人、非常勤が6人と1匹だ」

「非常勤の方が多いんですか？？？しかも1匹って」

「まあ普段は酒場経営だからな」

（遠回しに何でも屋って事を否定してねえかそれ？）

ラグナがそう思いつつ階段を上りきると細長い廊下に五つのドアが規則正しく並んでいた。どうやらこの建物は元々宿屋だったようだ。

「君の部屋に案内する前に常勤の一人を紹介しよう。」

そう言ってシエルビウスが階段上がってすぐのドアを開けると、黒髪で30歳ぐらいの女性がベッドで寝ていた。

「起きろイルノ！一人新しく入ったぞ！」

イルノと言われた女性は目をさましすばやく起き上がると何も言わずにラグナに近づいて顔を覗き込む。

すると、ほっと安心したような顔をした。

（なんで今この人俺の顔見て????）

「新しく入ったラグナ君だ」

シエルビウスが言う。

女性は数秒間ぼーっとして目をこすった後話し出した。

「私の名前はイルノ？リトレント。シエルビウス？リトレントの妻です。四羽では経理を担当しています。ラグナ？ガークラントさん、よろしく願います。」

そう言っただけで頭を下げた。おっとりとした話し方だ。

経理を担当していると言うように、部屋には赤い数字が書かれた紙が散らばっている、正直汚い。

「イルノさん、よろしくおねがいしま???!」

シエルビウスの妻と聞いてラグナはふいにいやな予感がした。
シエルビウスがそれを察知する。

「どうした？ラグナ君」

「ひとつ質問ですが????残り一人の常勤って????」

「勘がいいな、私達の娘だ」

「うわあああ!」

「何を叫んでいる?」

「家族3人だけで経営している店に入った人間の身にもなってくださいよ!」

「非常勤の人間がいるから家族経営オンリーの店では無いぞ?」

「大差ありません!」

こんな事になるのなら断っておけばよかったと思ったが、今更遅い。こつなりやこつちから前に出てやる。

「????で、その娘さんとやらはどの部屋に?」

「今は外に出かけているが、もうそろそろ」バンッ！

「ただいまー！雨で濡れちゃった！」

店のドアが勢いよく開き、一階から元気な子供のような声が聞こえる。

「帰ってきたみたいだな」

シエルビウスは呟く

「あれー？シエルいないの？」

「イルノの部屋にいるから来い！」

「はーい！」

駆け足で階段を上る音が聞こえる。

「紹介しよう、私達の娘、リルム？リトレントだ」

イルノの部屋のドアが開き、娘の姿が見える

赤い髪で短い杖を持ったあの少女だった

「ああっ！」

ラグナとリルムは互いに叫んだ。

「お前はあ！」

ラグナがそう叫ぶと、リルムは山でラグナと会った時のような顔になった。

「な????なんでこの人がいるの？」

その声は震えていて、先程の子供のような声からは想像も出来ない。

「前に二人は会った事があるのか？」

「会ったなんて単純なもんじゃありません！」

ラグナは山であつた事の顛末を興奮しながら話した。

「そんな事があつたのか、私の娘がすまないな。まあそのお陰で勧誘出来たんだから私としては娘を褒めてやりたいくらいだが。」

「一言多くありませんか!？」

「まあそのお陰で勧誘出来たんだから私としては娘を褒めてやりたいくらいだが。」

「訂正部分が違う！」

ラグナとシエルビウスが言い合っている間、リルムは顔を一切変えず黙っていた。それに気づいたシエルビウスがリルムに話し掛ける。

「安心しろリルム。今日から入ったシルドリン出身のラグナ?ガークラント君だ、変な人間じゃない。」

「????ほんと?」

「本当だ」

するとリルムの顔は急にはあつと明るくなると共に、ラグナへと近づいた。

「山ではあんな事をしちゃった上に置いていつちゃってごめんなさい!大事な荷物を運んでいて時間が無かったの! 名前はリルム? リトレント、16歳です!ラグナ君、よろしくおねがいます!」

彼女の声は再び元気な子供のような声に戻っていて、表情も生き生きとしている。

「よ????よろしく」

半ばリルムの勢いに押された形で答える。何故こんなにも表情に差が出るのだろうか。その差のインパクトが強すぎて山で起こった出来事について責めようとする気持ちよりも何故あんなに恐れた顔をしていたのか知りたい気持ちのほうが大きくなっていた。

「なんでそんなに????」

「さて、自己紹介も終わった所だし君を部屋に案内しているいろいろ説明しよう???と思うたが、私は今からリルムと少し話をする。すまないがラグナ君は自分で部屋に入っていてくれ。君の部屋は突き当たりにある。」

シエルビウスが割り込んだ。

「あ、わかりました」

聞きそびれてしまった。

「今は3時だから???君も疲れているだろう、7時に一階に降りて来てくれ。詳しい話はその時だ。」

（そういえばイルノさんがいるんじゃないのか？）

そう思つてラグナがイルノの方を見ると二度寝しているイルノの姿が見えた。

（おつとりしすぎだろ！）

ラグナは廊下に出た

（そういや真昼間から酒飲んだのか、何してんだ俺。）

そう思いながら突き当たりにあるドアを開ける。

部屋にはからつぽの本棚と小さい机と粗末なベッドがあり、まさに元宿屋といったような内装だった。とりあえず服を着替えてベッドにねっころがる。

（これから先どうなるんだろうかなあ）

そう思いつつぼーっとしていると、酒が回ってきたのだろうか、それとも一日中走り回ったからだだろうか、急に眠気が襲ってきた。

そのまま睡眠の泥に埋まりきるかと思つた瞬間、急にドアが開いた。

「おじゃましまーす！」

リルムの元気な声にラグナは引き戻された。まだ眠い目でリルムを見る。

「どうしたんですかリルムさん。」

リルムは両手を後ろに回してにこにこ笑っている。

「そんな敬語使わなくていいし呼び捨てでいいよ！」

「ああ、わかりまし??? わかった。どうしたんだ? リルム」

「質問なんだけど、ラグナ君って魔法使える？」

「!?!??? 恥ずかしながらまったく使えない。」

「ほんとに!?!」

「シルドリーンじゃ魔法使くとモンスターが寄って来るって言うて教えてくれなかったんだ。それにルトリーンには10年前に一回行ったつきりで魔法を見る機会もほとんどなかったし。」

「そつかー??? ちょうどよかった、はい、これ！」

そう言つてリルムは後ろに回していた両手をラグナの方へと向ける。その手には一冊のぶ厚い本が握られていた。

「??? 誰でもわかる魔法全書？」

「魔力に関連した物についてまとめたある魔力全書っていう本をさ

らにまとめた入門書だよ！本当は魔力全書そのものを渡したかったんだけどシエルが一般人が理解出来るような物じゃないからやめとけて？？？ラグナ君はどっちが良いと思う？」

「まあ魔法についてまだよくわからないし入門書のほうで良いよ。」

「じゃあ後で魔法全書も持ってくるね！」

「俺の意向完全無視！？」

「じゃあ夜になったらまた会お！それじゃ！」ボタン！

「？？？風と共に去りぬ」

ラグナは一言だけそう言ったあと、渡された本に目をやった。

「7時まで暇だし読んでみるかな」

机ではなくベッドに座り、ラグナは本を開いた？？？

誰でもわかる魔法全書：魔力について（前書き）

この度は「誰でもわかる魔法全書」をお買い上げいただきまして、誠にありがとうございます。本書は「魔法全書」の基礎的な内容のみを取り出し、さらに内容わかりやすくまとめた入門書となります。

ドライゼ？トールキン 編

誰でもわかる魔法全書：魔力について

魔力とは万物に変化させる事が出来るエネルギーであり、魔力を他の物に変化させる事を魔法と言う。
常に気体でいようとする性質を持つ。

《魔力の種類について》

第一次魔力、第二次魔力、第三次魔力の3つに分類される。

？第一次魔力

全ての物体と空気、水の中に含まれている魔力。3つの魔力の中で最も多く存在するが魔法として使う事は出来ない。

？第二次魔力

人間、フェアリユア、ディスタだけが持つ魔力。魔法はこの魔力を使って発動されるが他者の第二次魔力を魔法に利用する事は出来ない。
第一次魔力と接触した場合、ゆっくりと第一次魔力に変化する。

？第三次魔力

魔石が持つ魔力の事をさす。第一、二次魔力と接触した場合、すぐにその魔力に変化する性質を持つ。

《第二次魔力の制圧性》

他者の第二次魔力が過剰に存在する空間では、それ以下の第二次魔力を出すことが出来ない。

誰でもわかる魔法全書：魔法について？

魔力を変化させて自然現象を起こしたり身体能力を変化させる事を魔法という。

魔法を発動させるためには魔法陣を展開する必要がある。

魔法を使う事ができるのは人間、フェリユア、ディスタのみで、それぞれ魔法陣を展開して魔法を発動させる点は同じだが、魔法陣を展開するまでのプロセスが異なる。

《魔法の形式》

魔法には通常型、展開型、身体強化型の3つの種類がある。

？通常型

魔法陣に対して垂直方向に魔法が出る。遠い場所や地面に魔法陣を展開したり、同時に複数展開する事も可能。

？展開型

魔法陣を中心にして球状に魔法を展開する。

障壁を作ったりその球の内部に発動者の魔力を満たす魔法などがある。

？身体強化型

強化したい体の部分に魔法陣が展開されて発動する。

強化されている間魔法陣は消えているが、その部分は薄い赤色の光を帯びながら発動者の第二次魔力で出来た魔力粉末を振り撒く。

《魔力粉末とは》

魔力の結晶であり、雪のような形で羽毛のように舞い、きらきらした赤い光を放つ。

しばらく時間が経つと気体に昇華する。

誰でもわかる魔法全書：魔法陣について

《魔法陣の種類》

標準魔法陣と複合魔法陣の2つが存在する。

？標準魔法陣

同心円の形をした魔法陣で、一番中心の円を「核」と言い、そこから外側の円にいくにつれて「第一階梯」、「第二階梯」？？？と言う。

核でどのような魔法を使うか決定し、階梯で魔法の性能を向上させていく。

階梯は外側に行くほど複雑になっていて、核の種類毎に階梯も全て違う物になっている。

階梯にはある程度規則性があるので新しい階梯を発見しやすい。

第二階梯ぐらいいまでなら構造が簡単で誰でも扱えるが複雑な魔法を作ることが出来ないのが難点。

？複合魔法陣

四角形の魔法陣で、核が2～4個あり、複雑な魔法を使う場合に利用される。

階梯の概念がなく、核と核を結ぶ部分の構造を変化させる事で性能を変化させる。

核と核の間の部分の規則性がはっきりしていないので、既存の複合魔法陣を改良する場合は手探りになりがち。

構造が複雑なので使える人間は多くない。

誰でもわかる魔法全書：魔法について？

《魔法発動の手順と仕組み》

この項では人間による魔法発動方法について記述する。

フェリユアとディスタの魔法発動方法は当該項目で説明する。

？発動したい魔法の魔法陣を思い浮かべる。

？身体強化型ならば強化したい部分を、通常型ならばどこで魔法陣を展開したいかを念じる。

？魔法陣展開開始、核を中心にして展開される

？展開完了後、魔法発動

魔法陣を詳しく覚えていれば展開する時のスピードが上昇する。

このとき調整できるのは魔法の出力と魔法陣の数だけであり、その他の性能は魔法陣そのもので決定される。

展開された魔法陣に質量はなく触れる事はできない（光のような物）が魔力又は魔力を帯びた物体と衝突した場合はその部分が破壊される。魔法陣ごとの破壊された時の影響は以下の通り

・通常魔法陣

核が破壊された場合、その魔法陣は全て消滅し、一から再展開する必要がある。

階段が破壊された場合、その階段を含めた外側の部分は消滅するが内側は残る、途中から再展開が可能。

・複合魔法陣

どの部分が破壊されても全て消滅する。

ここで言う「破壊」とは、魔法陣のどこか一箇所でも切断された

場合を指す、つながりが維持できる程度であれば消滅しない。

誰でもわかる魔法大全：魔石について

>> 魔石について<<

「魔力が固体となった物」を魔石と言う

赤い色をしていて、性質はガラスとまったく同じ。

水または空気に触れると魔力を出しながら小さくなり、第一、二次魔力と接触すると内部の魔力を全て出した後透き通った無色の灰になる。

>> 魔石で魔法発動<<

やり方は以下の通り。

? 粉にした魔石と液体を混ぜて絵の具のようにする

? それを使つて発動させたい魔法陣を書く

? その魔法陣に魔力を加える

? 書いた魔法陣と同じ魔法陣が普通に魔法を使ったときのように展開される

? 魔法発動

一度使つて書いた魔法陣は消滅する。

魔法陣を覚える必要が無いので魔力さえあれば複雑な魔法も誰でも扱うことが出来るという利点がある。

>> 魔壮石について<<

内部の魔力が異常に多く、魔力を加えても灰にならないの魔石の事を魔壮石と言う。

何回でも利用することが出来るが、利用するにつれて利用した者の魔力と共鳴し、利用者と同じ血を持つ者以外の魔力には反応しなくなっていく、これを魔力の専一性と言う。

小さくなると大量の魔力を放出した後普通の魔石に戻る。また、加熱しても液体にならない。

>>エンチャントについて<<

溶かした金属に魔石を入れて混ぜるとその金属は魔力を電気のように伝達させる事ができる。

さらに混ぜる魔石の量を増やすと魔法を付与する事ができ、魔法を付与する事をエンチャントと言う。

エンチャントされた金属は身体強化型の魔法を使った時のように発光し、魔力粉末を出すようになる。

エンチャントを繰り返し返すと金属は徐々に劣化していき、最終的には灰のようになって崩れる。

そのため消耗の速度が速いので、エンチャントは一般的に使われてない。

混ぜた魔石の量が多い程エンチャントした時に魔法の効果が強く出るが、その分灰になるまでの時間が早まる。

誰でもわかる魔法全書：プロヴについて

>>プロヴについて<<

特定の人間が生まれつき持つ魔法のような力をプロヴと言い、その力を使うことの出来る人間をプロヴァーと言う。

一人のプロヴァーにつき一つのプロヴが割り当てられていて、一人が複数のプロヴを持つ事は無い。

たくさん種類のプロヴがあるが、総じて今の魔法技術をはるかに凌ぐ。

プロヴァーの背中には「円の外側にひし形」の形をした魔法陣がある、この魔法陣の様子はプロヴによって異なる。

プロヴの魔法陣は魔法として使うことが出来ない。

プロヴは一子相伝の性質を持っていて、親が子にプロヴを譲渡する形で引き継がれていく。子にプロヴを譲渡すると親は背中の魔法陣が消え、プロヴを使う事が出来なくなる。

プロヴを持たない親からプロヴを持った子が生まれる事がたまにあるが、なぜそうなるのかは不明

プロヴァーは魔力アレルギーを持ち、短時間に多くの魔力を摂取すると気絶する。

>>プロヴの発動方法<<

プロヴ発動時には魔石と発動者の魔力を必要とする

? 魔石に魔力を加え、プロヴを使いたいと念じる。

? 利き手の甲に背中の魔方陣と同じ魔方陣が浮き出る。

? 魔石が灰のようになり、プロヴ発動

魔方陣を展開する必要がないので魔法よりもすばやく発動させることが出来る。

>> 親から子へのプロヴの受け渡しについて<<

プロヴァーが親になった場合、子に自らのプロヴを与える必要があるが、最初に生まれた子にのみプロヴを譲渡する事が出来る。

プロヴを貰う事になる子の利き手の甲には譲渡すべき親のプロヴの魔法陣が描かれている。

プロヴの譲渡が終わると背中に魔法陣が現れ、手の甲の魔法陣が消える。

両親ともプロヴァーであれば第二子までプロヴを貰う事ができるが、どちらがどちらのプロヴを貰えるのかはランダムとなる。

また、三つ子など一度に三人以上生まれた場合、その中の二人だけがプロヴを貰う事が出来る。

>> プロヴを譲渡される子供について<<

親が子にプロヴを譲渡しない間、その子は不死となるかわりに非常に強い魔力アレルギーを持つ。

生まれた時はそのアレルギーが出てこないが、歳をとるにつれてアレルギーは徐々に強くなっていき、生まれてから四年程でピークを迎える。

ピークの状態では少量の魔力に触れた場合でも死ぬような痛みを体が襲い、普通の生活を行う事が困難になる。

プロヴを貰わないで八年経つと子は消滅し、フェリユアへと転生する。

誰でもわかる魔法全書：フェリリュアとディスタとモンスターについて

《フェリリュアについて》

人間のように考え、話す事が出来る生命体をフェリリュアと言う。

人間以外の複数の動物が混ざった姿をしていて、二足歩行したり空中浮遊できる種もいる。

人間だったころの記憶は無くなっている。

フェリリュアの体は全て魔力で出来ていて、体内の魔力が著しく減少すると魔力に変化して消滅する。

フェリリュアは常に体内の魔力をある一定の量に保とうとする性質があり、その一定の量の事を魔力基準値という。

魔法を使うなどして体内の魔力の出入りを多く行う程魔力基準値は上がり、歳をとるにつれて下がっていく。

平均して80年ほど経つと魔力基準値はほぼ0になり消滅する。そのため寿命は人間とさほど変わらない。

《フェリリュアの魔法発動方法について》

フェリリュアが魔法を発動させる時、魔法陣を覚えて魔法を発動させるのではなく、魔法陣を目に焼き付けて魔法を発動させる。

その点以外は人間による魔法発動方法と同じだが、この手段によって展開される魔法陣の展開速度はとても速い。

焼き付けの手順は以下のとおり。

？焼き付けたい魔法陣を見て焼き付けたいと念じる。

？目に魔法陣が核の部分からゆっくりと焼き付けられる。

？焼き付け完了、大体三分ぐらいかかる

ひとつの目に焼き付けられる魔法陣はひとつだけだが上書きが可能。同じ魔法陣をそれぞれの目に焼き付けると魔法陣の展開速度が早まる。

途中で中断すると焼き付け中の魔法陣は全て消える。

《フェリユアの再転生》

人間だった頃に大きく関わった場所や人間をフェリユアになってから再び見ると、転生前の人間だった時の姿かディスタに変化する。

ディスタか人間どちらになるかの基準は不明。

人間になった場合、人間だった頃の記憶がすべて戻り「フェリユアに変化出来る」プロヴを持つようになる。

《ディスタについて》

理性が消滅して、凶暴化した状態のフェリユアをディスタと言う。理性が無いため喋る事ができず、行動が野生的になる。常に単独で行動する。

常に魔力を求めている、魔力を手に入れる為に生物を捕食する。

魔力基準値が無くなっており、魔力を取れば取る程体内の魔力が増幅していく。

体内の魔力が増えると体が大きく、より攻撃的な姿に変化する。

衝撃波を起こす魔法のみ使う事が出来る。

衝撃波の威力は凄まじく、大型のフェリユアであれば一度の衝撃波で村を一つ吹き飛ばす。

《モンスターについて》

動物とディスタの中間に位置する生命体をモンスターと言う。

基本的にディスタと同じ特徴を持つが、魔法を使う事ができず、体も小さい。また、魔力を摂取しても体に変化しない。

思考能力は動物とほぼ同じで集団で行動する。

もともと存在しない生命体だったが八年程前に急に発生した。なぜ発生したのか、どこから発生したのかは現在でも不明。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0474w/>

速贄の聖女達

2011年10月9日14時56分発行